

# 「南総里見八犬伝」は民衆をどう描いたか

坂 坂 耀 子

はじめに

その題材が架空であれ史実に基づいたものであれ、壮大な作品世界を持つ長編の歴史文学では、しばしば作者の善悪を判断する基準が求められる。作者自身の発言も含めて「勸善懲惡」がその創作動機と語られる「南総里見八犬伝」（以後は「八犬伝」と略する）ならなおのこと、それは自明の理であるようだが、必ずしもその基準が明らかになっているとは言えない<sup>1)</sup>。

たとえば中世の軍記物「平家物語」においては、正義や善の立場に立つものが守るべき基準は①天皇家への恭順②神仏への崇敬③京都を主とした民衆への配慮、の三点に大略帰結するようである。だが、このいずれもが近世の文学では既に確立していない。京都の天皇家に対する江戸の將軍家の存在、それにともなう複数むしろ多数の文化圏の成立、江戸時代初期の西鶴の作品にも既に見える神仏の卑俗化などは、これらの基準の根源にあった人々が共通して持っ

ていた価値を相対化させ、これらを前提なしの正義や善の基準としてはうけ入れ難くさせている。

その一方で「八犬伝」をはじめとする馬琴の作品を読んでいると、そこに示される善悪の基準が今日の最も大衆的で保守的な娯楽作品、たとえばテレビドラマの時代劇のそれとさほど差がない印象を受ける。支配者や権力者の悪の根拠として描かれるのは、法を無視して私腹を肥やす、性的な放縦、民衆への苛酷な対応などであって、現代の我々の持つこのような感覚の淵源は馬琴にあるのかとさえ想像を逞しくしたくなる<sup>2)</sup>。

馬琴の作品における善悪の基準を探る手がかりの一つとして、本稿では「八犬伝」において百姓、漁民、狩人などと呼ばれる庶民あるいは民衆がどのように描かれているかを見る。なお、このような馬琴の設定や描写が、当時のどのような社会思想と関わっているか、また同時代の他の作家、あるいは馬琴の他の諸作品ではどうかといった検討は今回は行わない。

## 一 滝田とその近郊の村人（第一輯卷一―卷四）

結城の合戦に敗北し父を失った若武者里見義実が、忠義な家来数人と安房の滝田城に身を寄せ、城主山下定包の卑劣な計画で殺されそうになった裏をかき、定包を倒して滝田の城主となる。このいきさつは、定包側から言うところ「当国へ漂泊して、愚民を惑し、野武者を集め、不意に起て東条の城を乗取り」（巻三、第五回、定包談）、「汝が主なる義実は、乞食したる浮浪人。白浜へ漂泊して、愚民を惑し、土地を奪ひ」（巻四、第八回、燕戸訥平談<sup>3</sup>）となるように、定包に殺された前の城主に仕えていた忠臣金碗八郎が義実の臣下となって、定包の苛政に苦しんでいた農民たちに決起を呼びかけ、彼らが義実を支持してともに戦った結果であり、農民等の協力がなければ義実は勝利どころか戦いを始めることさえできなかった。

この間の戦いのさまざまな局面で、定包が民を虐げていることが強調され、対する義実は兵糧が不足しても畑の麦を刈ることをしないなど常に民の辛苦を思いやる。安房一国の支配者となるまでもそれ以後も、常に民の幸福を考え、その結果国は栄えた。

だが、その幸福と繁栄の中で、最大の功臣であった金碗八郎は恩賞を受けた際、かつての主君神余光弘の死をとどめられなかったとの理由で自害する。これには定包の妾で

死罪となった玉梓の呪いが関わっているとほめかされている。そういう意味もこの死にはあるが、玉梓の呪詛がこれ以後も長く続いてさまざまな挿話の伏線になると同様、八郎自身がここで述べる自害の理由もこの後の物語の展開に深く関わる。定包に騙されて前主光弘を殺してしまい自らも処刑された義侠の農民朴平と無垢三は、ともに八郎の家僕であり、このことから主君の死に責任を取らねばならないと彼は言う。八郎の自害の原因は、この農民二人の行動が招いたものでもあり、彼らの存在は玉梓ほどではなくても決して軽いものではない。朴平も無垢三も、その血を引く者たちが八犬士やその周辺の人々となって登場し活躍するように、この義侠の農民二人が行ったまったくの悲劇で失敗にすぎなかった定包暗殺未遂事件は、あたかも顕彰か鎮魂のように後の部分で繰り返し語られており、玉梓の呪詛が解けていく過程と呼応するかのようである。

## 二 大塚の村人（第二輯卷四―卷五）

義実の娘伏姫が玉梓の呪いもあって、飼い犬八房と山で暮らすことになり、両者の死と同時に姫の数珠が飛び散って八つの玉が虚空に消えるという有名な部分では、話は義実一家の家族愛に集中するため、民衆の登場はこれと云ってない。ただ姫の住む山への樵夫や狩人の出入りを禁ずる

などの処置を詳細に述べる馬琴は、これらの事件の展開がその舞台となる場所を生活や仕事の間とする人々にとつてどのような影響があるかを想像するのを忘れてはいない。

その玉を持つ犬士の一人犬塚信乃が生まれ育つ武蔵国大塚で、村人たちは再び大きな役割を果たす印象的な存在となる。

信乃の父番作もまた義実と同じく結城合戦で父を失い、逃げのびて故郷に戻るが負傷のために足が不自由な障害者となり、姉夫婦が彼の財産を奪つて村長になっている。番作は姉夫婦とは交際を避けたまま同じ村に妻と暮らし、信乃を育てる。

番作が村に帰つた当初から村人たちはあらゆる方法で彼を支援する。番作の姉は親不孝の遊び好き、夫となつた男もまた「つまはじきせざる者なき、いたづらもの」であつた。今は村長となつていても村人はそれを忘れていない。里老の呼びかけに応じて集まつた人々の口々に憤つてかまびすしくしゃべつた声を馬琴は次のように記す。

「わが村はむかしより大塚氏の采地たり。一旦断絶するといへども、本領安堵の今に至て、実子は日陰の花と凋み、姉夫とはいひながら、いたづら者の墓六（姉の夫）に、すべて横領せられし事、これにましたる不幸やある。さりとて今さらに争はんは、世話にいふ、証文の出後れにて、勞して功なき訟なるべし。弱きを扶けて、強きをくぢくは、

東人のつねぞかし。憎しと思ふ墓六が面あてに、番作ぬしをばともかくも、当村中が引承て、養ふてまゐらせん。足はなえても、手はくぢけても、心やすく思ひ給へ」

村人たちは金を出し合つて買い求めた家と田畑を番作夫婦に与え、夫妻は村の子どもたちに読み書きや家事を教え、農事に益する本などを著して村に貢献する。村人たちのこの正義感による善意が狭い村中での両家の対立を更にあおつたとさえ予想される、息詰まるように生き生きと細かい描写が続く。その中でついにくつかの衝突を経て番作は自害に追い込まれ、既に母が病死していた信乃は墓六夫婦に引きとられる。彼の世話を口実に亡父の家と田畑を奪う伯父夫婦に村人たちは啞然とするが抵抗できない。

### 三 大塚の村人（第五輯卷二）

やがて成長した信乃は伯父たちの企みで家から遠ざけられ、父の旧主成氏のもとに赴くが献上すべき宝刀を墓六がすりかえていたため、誤解されて追われる身となる。一方、大塚村では、娘を陣代に娶わせようとした墓六のたくらみが失敗し、怒つた陣代によつて墓六夫妻は斬殺される。信乃に使用人として仕えていた、実は彼もまた玉を持つ盟友の一人犬川莊助は主人の仇とそこで陣代を斬るが、逃げ延びたその家来の偽証によつて、陣代のみならず墓六夫婦

の殺害までも行つたと濡れ衣をさせられ、拷問にかけられて自白しないまま磔刑に処せられることになる。

大塚の里老たちは殺された前陣代同様に残虐な新陣代に呼びだされ、この決定を告げられる。彼らは「呆れ果て、しばし目と目をあはしつゝ、こらへかねたる一兩人、麻の袴のそば引揚て、縁がはに進み近づき」、筋を通した抗弁を行つて再調査と恩赦を乞う。しかし陣代は怒つて「再度そのようなことを言えばおまえたちも投獄する。命が惜しくはないか」といきまゝ。里老たちは「権におされて」それ以上言えず戻つて村人に告げる。村人たちは齒をくいしばり腕をくんで協議し、「鎌倉へ直訴しよう」という声があがつて皆同調し騒然となる。だが里老たちは「今から鎌倉に行つても、明日の処刑にはとても間に合わない。長いものには巻かれろという。莊助は身分が低いし、極刑にはならないかもしれない」と人々を説得し、里人たちはいきどおりながらも思いとどまる。

この間の村人たちの描写は熱氣にみちて緊迫感が漂っており、大塚村を舞台にした一連の話の中で彼らの存在は非常に大きい。翌日、処刑が実行される寸前、新たに邂逅した盟友らとともに戻ってきた信乃によつて刑場は襲撃され莊助は救われる。この時、刑場で莊助の死を予測して泣きながら見守つていた村人たちの、この救出劇への反応は記されない。だが刑場から逃亡する彼らを助ける船頭は最初

の登場の際には一介の村人と見えた老人であり、老夫婦（姥雪と四郎と音音）と若い嫁二人（曳手と単節）だけの彼の一家が最後まで犬士たちを支えて華々しい活躍をすることを思うと、大塚村の里人たちの精神は、この一家に引き継がれたようにも見える。

#### 四 糠介と背介（第三輯卷一・第五輯卷二）

また、この文字どおり名もない村人たちの中でわずかに名前を与えられて活躍している、暮六夫婦宅の使用人糠介と背介の存在も印象的である。糠介はやや滑稽な役回りもつとめつつ、善意の人として信乃一家の運命をしばしば狂わせている。彼が行つた忠告や協力は思いがけない結果を招いて信乃たちを窮地に追い込む。だが彼は悪人ではなく、信乃との信頼関係は温かく深い。やや愚鈍な愛すべき庶民である彼は、八大士中恐らく最高に近い戦闘能力を持ち積極果敢な性格でもある犬飼現八の実父だということが後に判明する。

八大士中では道節と並んで最も華やかな存在である現八の実父が、時に愚鈍で滑稽でさえある素朴な庶民糠介であるのは、やや意外にも見える。しかし、現八の道節とちがつてどこか地に足のついた温かさはこの設定と無縁ではなからうし、彼と莊助は八大士の中では最も身分の低い民衆の

要素をその体内に具えた存在として描かれているのではないだろうか。

背介もまた使用人で、めだたない朴訥な老人である。墓六夫婦が陣代に殺害された時、莊助を除いてはその場の唯一の目撃者だった彼は、そのために苛酷な糾問をうけて死亡する。支配者側が莊助に罪を着せようとしていることは明白なのだが、それをあくまで法的な手続きを取って形式を整えようとするところにも「八犬伝」の描く権力者の特徴があるし、それをことこまかに描写するのが馬琴の特質でもある。支配者たちは背介の証言を求め瀕死の彼が首を動かすのを肯定のしるしと解釈し、そのことを莊助に指摘されると逆上して発言を封じる。このようにして結局背介は莊助を極刑にする重要な役割を果たしてしまうのだが、それは彼の意志ではないことをこのように丁寧に説明するのは、背介のこのように利用された責任を明白にしつつも、彼を免罪している馬琴の周到な配慮でもある。

背介自身も折檻の傷により死ぬ。彼は莊助の処刑に結果的に加担したのか。利用された被害者か。またはその両方か。いずれにしても救いのないこの罪のない老人の死に、とりたてて馬琴は評を加えない。だが、あえて考えるなら同じ使用人の立場であり、同様に責められながら霊玉の力で生きのびることができた莊助という犬士のその後の活躍に背介の無念もまた霽らされているようである。

## 五 行徳の村人（第四輯卷一―卷五）

話はやや前後するが、刑場を襲って莊助を救出する以前に、信乃は村雨丸が偽物だったことで旧主に曲者ととがめられ、捕り手としてさしむけられた現八と盟友であることを互いに知らぬまま、有名な芳流閣上の決闘を行った後、もう一人の盟友で力士の小文吾が住む漁村、行徳に現八とともに流れ着く。この間は城中の描写が主であるから民衆は登場しない。

行徳の村で追っ手から隠れて数日を過ごす内に、彼らは小文吾の甥にあたる赤ん坊の親兵衛が玉を持つ盟友であることを知る。小文吾一家の家族関係が緊迫した筆致で描かれる名場面だが、親兵衛の両親がそれぞれに、「一」で述べた義民朴平の襲撃事件に関わった人物の血を引くという因縁が明らかにされる。玉梓の呪いと同様、朴平の事件もまた後の人々の運命を左右するのだ。

ところで、この行徳の村の人々の姿は、滝田近辺や大塚村の里人たちのようには明らかではない。描かれていないのではなく、むしろ主人公の犬士たちは村人たちのただ中にいて、これまでと比較にならないほど接近した位置で彼らと接している。だからこそ却って彼らの総体やその意図が見えにくい。

作者の視点はここでは信乃や小文吾と同化している。村

人の意志も全体の状況も描かれないのが逆に、身をかくし人目を気にする彼らの心境を伝えるのだ。どこまで意図的に行われたかはわからないが、馬琴のこのような手法は実

に的確である。

更に二つだけ、問題点の提示をしておきたい。  
このように村人の個々人が生き生きと描かれながら、総体としての村人の動向が描かれないのは、後に小文吾が関わる牛合わせの村（第七輯巻七、第八輯巻二）でも共通する。力士や牛飼いとしての村人個人が名前も与えられて個性豊かに描かれる分、その背後の大勢が霞む。作者の経歴と安易に結びつけることは慎みたいが、あるいは若い頃力士も含めたさまざまな地方での興行と関わった馬琴の体験が影響しているかもしれない。

もう一つは行徳の場合、小文吾の父で土地の宿屋を経営する文吾兵衛の性格をどのように定義するかが問題となる。彼もまた有力者の村人であるにはちがいないのだが、民衆の一人とするには犬士たちに関わりすぎている観もある。このような、もともとは無関係なのだが協力させられ時には犠牲になってしまう存在はこの種の作品には不可欠だが、これ以後の中盤からは犬士たちの活躍の舞台が広がり高い階層との接触も増加する中、民衆のみならず武士階級にもそのような人物が現れはじめる。序盤の、主人公たちを庇護し支える存在であった人々が、終盤では庇護され支配さ

れる存在になるまでの過渡的な時期、いわば主人公たちと対等に向き合う中盤では、そのような存在の人々の犬士たちとの位置や距離はきわめて流動的であり定義しにくくなる。それがまた作品の面白さであり、馬琴の巧みさなのでもある。

## 六 赤岩の村人（第六輯巻五、第七輯巻三）

最後に登場する犬士犬村大角の父一角は赤岩村の郷土で優れた武芸者だったが、庚申山に住む大山猫に食い殺され、一角に化けた山猫は大角夫婦の命をねらう。通りかかった現八の助けで大角は大山猫の正体を知り退治する。

この村の人々は最初に現八に会って山猫の話をして聞かせる山中の茶屋の主鴟平（彼は獵師で、年とって狩りはやめたが、まだ腕に覚えはあり、山の案内人も務める。またこの村の人々が農作業の間に旅人の案内の仕事をするといいう村の生活実態が、彼の話で説明されている）をはじめ、山から帰って以来人が変わって幼い息子を虐待しはじめた一角（実は山猫）をいぶかり、不遇な若夫婦の大角と雛衣に同情して、住まいを作って生活を保障してやっている。だが、信乃のいた大塚村の人々が村長暮六と時に対立したように山猫の一角に対して積極的に行動を起こすといったことはしない。この村で山猫の一角にしいたげられつつ従

うのは、人間よりも森の精霊たちであり、山猫が死んだ後、その眷属や部下を殺して山に去る。一見同じ山猫の手下と見えた彼らの中に、それなりの力関係や対立があったことを描く馬琴の目は物語世界に厚みを与えるが、これは本来なら人間の集団に注がれる目であろう。精霊たちがそのような役割をになうこともあって、この村の人々は悪に對して葛藤し対立する勢力として描かれることはない。

だが、すべての謎が明らかになり事件が解決した後で、大角と現八は騒ぎを知ってやってきた村人たちに、事件の経過と真実を説明する。人々は驚きつつもそれを理解し納得し、亡くなった一角や雛衣の供養を大角とともにに行い、大角は土地や屋敷を売った金を村人たちにわけあたえ、感動した村人たちは旅立つ二人に別れを惜しみ、「送りて四五里に及ぶもの、一百余人に及びけり」という。

この話の前後に、小文吾や信乃がそれぞれ旅の途中で事件にまきこまれ、行徳の文五兵衛と共通する、民衆が支配者か判断しにくい立場の土地の役人なども登場するが、事件が一段落した時、犬士たちは「その土地の村人たちに説明して了解を得る」という場面がしばしばある。人々にすべてを話して事の次第を理解してもらうことで、問題は最終的に解決する。村人たちは正義を守る者を誤解し、悪に籠絡もされる。だが、その迷妄を解くことも含めて彼らの信頼を得るにいたらなければ、戦いの完全な勝利はない。

「八大伝」の中の民衆は多くの欠点や弱点を持ちながらも、常にそのような一種の権威ある位置を占めている。彼らに理解されなくてもいいという感覚は犬士たちの中にはない。

## 七 穂北と館山の村人（第八輯巻四、第九輯巻十六）

旅を続ける現八と大角はふとしたことから盗賊とまちがわれ、千住河に近い穂北の里の豪族水垣夏行に捕らえられる。来合わせた信乃と道節も協力して誤解がとけた後、水垣一家に彼らは歓待される。

水垣家は結城や豊島の殘党の血筋で犬士たちとの関わりは深い。だが、それとは別に彼らは村人の中の支配層であり、夏行は田畑の開墾を推進したことで人々から長にされた理想的な支配者である。ここに滞在しながら盟友の一人犬坂毛野の仇討ちの戦いに協力したりする中で、信乃が占拠した五十子城で城中の物資を民衆にわけあたえるなど、支配者としての姿勢を彼らはこれ以後示すことが多くなる。

一方で安房の館山では、妖術を操る妙椿狸に護られて、山賊の息子素藤が城主となり権力を握る。彼はついには里見家の浜路姫との婚姻を望み、若君を人質にとつて戦いをいどみ、成長して勇士となった犬士親兵衛に二度の敗北をしてついに妙椿もろとも滅ぼされる。

ところで、素藤が登場する少し前に、ちやだい大坊が妖術を操

る法師らにあざむかれて供物を奪われていた村を救う挿話が登場する。馬琴自身はこれを、大坊の偉大さを示す機会がなかなかないので作った話だと説明する。だがそうであったとしても、ここで描かれているのはたぶらかされる犠牲者としての村人の姿である。大坊の指示に従って勇ましく戦って法師らを倒すのも村人たちなのであるから、彼らは愚民で弱者としてのみ描かれているわけではない。だが、それに続く素藤の話でも悪人である彼が、たまたま知った疫病の妙薬の製法を利用して人々の信頼を集め、権力を握って行く過程は被害者となる村人たちの姿が読者にはもどかしいであろう。素藤の支配圏に大坊が現れることはなく、人々は結局、権力者となった素藤が見せ始めた理不尽さや残酷さによって真実に目覚めるしかない。

大坊の挿話の時と同様、だまされる里人を描く馬琴の筆致にいらだちや哀れみは見えない。むしろ素藤の手管には彼の実力以上の好運さが味方していて、おそらく誰でもだまされるしかなかったと思わせるように馬琴は書いていく。そして、素藤が里見家と対決し戦いを始めるにいたって、支配下の村人たちはさまざまな運命に翻弄される。若君義通が拉致される現場となった神社の神官たちの判断や行動、素藤に味方して後に里見家の忠臣となる人々など、敵と味方がめぐるしく入れ替わる。中でも印象的なのは素藤を狙って殺される南弥六で、彼は「一」で登場した朴

平とともに残酷な支配者を討とうとした州崎無垢三の孫である。

このようにさまざまな人々の群像をいわば濃淡をつけて描きながら、馬琴は常に無名の群衆としての領民たちの運命を描くことを忘れない。素藤を最初支持して暴君を倒した彼らが、素藤の苛政に「前の主の方がよかった」と嘆くこと、敗北し生け捕りになった素藤を見に、疲弊した村人が集まってくること、再度権力を握った素藤が復讐のように自分を裏切った領民たちに暴虐の限りをつくすこと。「支配者次第で民衆の運命はどうにでもなる」という事実が、それらの描写を通して重層的に伝わってくる。

#### 八 穂北村のその後（第九輯卷三十一―卷四十七）

実は素藤の支配下にあった人々以上に、運命に翻弄されるのが穂北とその周辺の村人らである。

水垣家は一時期犬士たちの隠れ家でもあった。それがやがて犬士たちと敵対する扇谷定正の知るところとなり、彼らは水垣一族を滅ぼそうと押しかける。迎え撃って死のうと決意した夏行（既に病死）の婿有種は妻の重戸の諫めもあって、一族を率いて下総にいったん落ち延びる。この時穂北の村人たちは皆彼に従って、家族を連れ家財道具を運んでともに村を捨てて同行する。からっぽになった村を襲っ



た定正の軍はやむを得ず、隣村の人々をとらえて城に連行し牢に閉じこめる。

これをきっかけに定正ら管領家と里見家との全面戦争が起こり、それが里見家の勝利に終わった時、この城も毛野と道節によつて奪い返され、瀕死の村人たちは皆解放される。有種もまた自分の領民とともに穂北の村に戻る事ができた。

だが、城が開城された後、穂北の隣村の人々がやつてきて、自分たちを苦しめたかつての城主たちの引き渡しを乞う。これが信乃や大角、莊助や親兵衛だったらどうだったかわからないが、この城を占領していた犬士は毛野と道節という最も敵に厳しい二人で（そういう設定にした馬琴の配慮も的確だが）彼らは元の城主らを村人たちに引き渡す。「八大伝」にはあまりない酸鼻を極めた描写で彼らは村人に惨殺され、中には彼らの肉を食う者までいた。

穂北の村人たちは氷垣家を信頼し忠誠を誓つてどこまでも行動をとにもする。そのことで彼らは村を一度失うが、隣村の人々が味わつた悲劇は免れた。彼らは自分たちの選んだ長とともに非常に主体的に行動しており、世の動きの犠牲者という趣はない。隣村の人々も思いがけない不運にまきこまれながら最後には過激なまでの復讐を行つて恨みを霽らしている。素藤の興亡に一喜一憂させられた館山の村人たちの不安定なありように比べると彼らの動きはやや

単純で平板であるが、それだけに与える印象は明確で強い。彼らはたしかに支配者や指導者によつて運命を大きく左右されているが、彼らもまた意志をもつてそれらの動きに対応している。一村まるごとの逃亡、かつての支配者の残酷な処刑などかなり非現実的な話なのに、それをまったく不自然に思わせないほど物語の細部を描きこみ、流麗な展開で見せて行く馬琴の技術も高く評価すべきだろう。

## 九 から竿と馬と猪（第九輯卷三十九卷四十・卷四十五）

その最後の大戦争であるが、いわゆるファンタジー小説の多くの大団円に登場するハルマゲドンと異なつて、この戦いには里見家が敗北するという不安がほとんどない。八犬士が登場するたびに彼らは華々しい勝利を収める。時に食料が水没するなどの事故があるにせよ、危機らしい危機はないと言つてもいい。

この戦いのすべてを通して、里見家側は民衆に被害を与えないように配慮する。敵陣に攻め込ませる牛を村から調達しようとする耕作に馬しか使わない村で牛がおらず、たまたま漂着して飼ひ慣らされていた猪が代わりに使われることになる。単純に牛を徴発させない工夫もあつたろうが、猪を使うと決まつても、村人たちにはしかるべき恩賞を約して感謝されている。米が水没した際も、乏しい米を

村人にわけあたえている。

途中でかけつけて参戦する親兵衛が、武器を持たぬ部下たちに無人の農家の庭先のから竿を与えようとして、「価をはらわねば」と金を置いていくのなどは徹底しているという他ない。

それに対して定正は敗北して退陣する際、馬がなかったため農民たちの馬市から無理やり馬を数頭調達し、怒った馬商人たちから追われ戦いを挑まれる。何とか彼らを倒したが、後に良臣助友から、「馬を奪ったから民を怒らせ、あのもめごとが起こつて時間が取られた。あれがなければもっと早く逃げ延びて戦いの情勢も変わったのに」今は千萬言うとも役なし」と言われて定正は恥じて答えられない。逃走時に武将が農民の馬を奪うのは非常識で、誰もいない農家のから竿を取るのに金をおいていくのが常識であり、前者は敗北し後者は勝利するのが「八大伝」の世界である。馬琴の勧善懲悪の善悪の基準の一つに「民衆への配慮」があることは否定できないのではないだろうか。

戦時処理の一時期、大角が支配した相模の村人たちは彼が去るのを恨み、慕って泣きながら港で見送つたと馬琴は記している。大角の善政の描写は型にはまった表現でさして具体的ではないが、そこにも民衆に対する態度や民衆との関係の一つの理想が描かれている。

## 十 民衆も支配者も神ではない

最初に述べたようにこういった馬琴の傾向が同時代の中でどれだけ特殊なものなのか、あるいは彼自身の中でどのように変化発展していったのかはまだ検討できていない。ただ「八大伝」で見ると、馬琴は八大士をはじめとする理想的な生き方をする人々が、民衆とどう関わるか、民衆にどう評価されるかをかなり意識して描いている。むしろそうすることによって、そのような人物を具体的なものとして浮かび上がらせようとしているようである。

だが馬琴は民衆を決して常に正しく神にひとしい存在として描くのではない。その弱さや愚かさや凶暴さも的確に表現している。そのようなものを生まざるを得ない彼らの置かれた状況や陥る心理もまたていねいに説明する。民衆を闇雲に愛してはいないが嫌悪も恐怖もしてはいない。そこには冷静で温かい観察眼と研究対象に対するような旺盛な好奇心がうかがえる。

それはまた、「八大伝」の中の民衆と対極にある数多くの支配者たちに対しても同様である。「八大伝」の支配者たちはいずれも過ちを冒しながら成長して行き、絶対的な悪人や善人は存在しない。この点でも馬琴の作品は注目し値するが、これについてはまた稿をあらためて論ずることとしたい。

## 注

- (1) 「勸善懲惡」については、浜田啓介「『勸善懲惡』補紙」(若草書房「日本文学研究論文集成二二・馬琴」所収)及び同氏執筆の岩波書店「日本古典文学大辞典」の「勸善懲惡」の項に詳細な論述があり、参照されたい。
- (2) 近年ではNHKの大河ドラマ等を中心に「平和を希求する」ということも正義の側の条件となっている。私の授業ノート「悪の造型」(花書院「食事の前には読めない本」及びホームページ「板垣耀子研究室」に所収)を参照。
- (3) 読解の便のため、本稿では馬琴の表記を若干改めている。
- (4) 「江戸の女、いまの女」(板坂 革書房)所収の「情あるおのこ」参照。

(いたさか ようこ・本学教授)